

小学生を対象にしたステークホルダーとの協働による 防災教育カリキュラムの開発(2)

○東 徹哉^A, 牧野治敏^B, 山崎栄一^C, 竹中真希子^D, 森田和良^E

HIGASHI Tetsuya, MAKINO Harutoshi, YAMASAKI Eiichi, TAKENAKA Makiko, MORITA Kazuyoshi

津久見市立青江小学校^A, 大分大学高等教育開発センター^B, 大分大学教育福祉科学部^C

大分大学教育福祉科学部^D, 筑波大学附属小学校^E

【キーワード】 小学生, ステークホルダー, 協働, 防災教育, カリキュラム

1 目的

筆者らは、河口干潟の保全と治水に関する総合的な学習カリキュラムの開発¹⁾をきっかけに、理科教育の総合的な発展型としての防災教育カリキュラムの必要性に注目している。更にその展開において、ステークホルダーとの協働が有効であることを実証した²⁾。

そこで、今回は、「自ら考え・行動し、地域とともに巨大地震から命を守れる人になろう」というテーマのもとで行った防災教育カリキュラムの開発とその実践結果を報告する。

2 方法

(1) 授業実践

授業実践は、2007年10月～2008年1月にかけて、津久見市立青江小学校の5年生23名を対象に学級担任が行った。

(2) ステークホルダー

ステークホルダーとは、本学習における利害関係者を意味する。一連の授業は、学習に取り組む子どもたちの他、保護者、大見家具、津久見消防署、ホームワイド白杵店、津久見市役所総務課、大分大学教員、地域防災推進委員、(株)ソニー太陽、ドコモアイ九州との協働のもとに実施された。

(3) カリキュラムの検証

授業の指導計画は、全18時間で、津久見市教育研究会での提案授業、所属校での校内研修での提案授業を含んでいる。全ての検証終了後に、児童による授業評価を行い、どの学習場面が学習目標に対し有効であったのかを統計的に調査した。

(4) 授業評価への調査方法

児童には、3月に学習発表会で作成したスライドショー(全26枚)から「自分・家族・地域の人の命を守る学習として良かった場面」の番号で順位付けを行い5つ選ばせた。また、その理由も記述した。アンケート後、評価の高い順に5点～1点の得点化を行った。学習場面は、8つに分類し、得点をもとに考察を行った。

3 結果

アンケートの結果を表1にまとめた。

表1 「命を守る学習への児童評価」 回答者数23名

1位	防災用品調べ・ポスター作り	66点
2位	消防署と家具屋の家具転倒実験	62点
3位	緊急地震速報のチラシとTV視聴	47点
4位	1月17日避難訓練(地震避難)	34点
5位	校区の危険箇所マップ作り	30点
6位	防災学習の発表会(2回)	29点
7位	ケータイを使った危険箇所調べ	18点
8位	防災ラジオ作り体験	17点

4 考察

命を守る学習として役に立つと評価された学習内容は、学習全体の導入部分だった。

第1位となった防災用品調べは、地元ホームセンターとの協働による授業であったが、小学5年生の児童に親しめるポスター作りという手法と、そのポスターを1月17日の防災の日に合わせてホームセンターの店内に掲示されるということが、評価されたと考えられる。

また、家具転倒実演と救助方法の学習は、わずか1日の授業にも関わらず高評価を得たのは、体験学習の有効性を示す結果と言える。

5 まとめ

地震から命を守ろうとする防災意識を高めるためには、より分かりやすい活動や体験から学ぶことが重要であることを明らかにできた。

参考文献

- 1) 東徹哉(2006)「小学生を対象とした河口干潟の保全と治水に関する総合的な学習カリキュラムの開発」平成18年度科学研究費補助金奨励研究(課題番号:18906033)
- 2) 東徹哉(2007)他「小学生を対象にしたステークホルダーとの協働による防災教育カリキュラムの開発(1)日本科学教育学会研究会・九州沖縄支部会, 科教研報 Vol.22No.2, pp.49-53.